

信長と戦った山城

滋賀県立大学教授 中井 均

おだにじょう
小谷城は湖北の戦国大名浅井氏三代50年の居城として有名
あざい
です。浅井氏は元来湖北の守護京極氏に仕える土豪でしたが、
すけまさ
亮政のときに湖北の支配者としての地位を築きます。そのときに
築かれたのが小谷城でした。小谷築城は戦国大名浅井氏の独立
宣言としての築城だったのです。その大きな特徴が城を構えた
小谷山の山容です。小谷山は富士山形を呈する非常に美しい
山です。その山容は湖北のどこからも望むことができます。さら
に山頂には小谷寺が建立されており、信仰の山でもありました。

戦国大名として湖北の新たな支配者となった浅井氏は、単に
軍事的に重要な場所ではなく、山容や信仰をも考慮して小谷山
に城を構えたものと考えられます。そして何よりも山頂からは浅
井氏の支配地である湖北地域が一望できます。自らの支配地を
望むことのできる山に城を構えることが最も重要だったのです。

この小谷城で注目されるのは、発掘調査によって山上の大広
間から巨大な礎石建物群と大量の遺物が出土したことです。通
常、戦国時代の山城は詰城と呼ばれる防御空間であり、住むた
めの施設ではありませんでした。ところが小谷城では山上で常
に生活していたことが明らかになりました。おそらく戦国時代
後半になると、戦国大名クラスの城郭では、山麓の居館だけ
ではなく、安全保障のために山城にも居住空間を持つようにな
ります。そして山麓の居館を公邸とし、山上には家族などを住ま
わせていたものと考えられます。小谷城の山上大広間は、長政
が迫りくる信長との戦いに備えて、お市や三姉妹を住まわせて
いたものと考えられます。

今ひとつ小谷城で注目されるのは、実際に戦った城である
ということです。実は戦国時代に築かれた城の大半は一度も戦
うことなく廃城となっています。ところが小谷城では幾度となく戦



いが繰り返されています。その最後の戦いが織田信長との戦
いです。元亀元(1570)年に浅井長政は信長を見限ります。そし
てその後3年間にわたって信長の小谷城攻めが始まります。な
ぜ信長はそれほど時間をかけたのでしょうか。『信長公記』に
は、小谷城が高山節所なため一気に攻めることは難しいと記し
ています。つまり小谷城は堅固な山城なので力攻めをしなかつ
たわけです。これは信長にとってリスクを避けるための作戦
だったといえるでしょう。

ところで、この信長との戦いについて発掘調査では興味深い
成果がありました。それは火災の痕跡が認められなかったこと
です。建物が焼失すると、柱を据えた礎石に火災痕が残ります。
また遺物にも二次焼成の痕跡が残ります。そして何よりも土が
赤く変色して焼土となります。小谷城の発掘調査ではこうした
痕跡が一切検出されなかったのです。木下藤吉郎(豊臣秀吉)
が先鋒を務めた攻撃に小谷城は落城しますが、そのとき藤吉
郎、浅井長政の双方ともに城には火をかけなかったのです。

私たちは落城というと、城に火がかけられ炎上すると思いが
ちですが、それは単なるイメージに過ぎないことが小谷城の発
掘調査で立証されたのです。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。